
とある異界の英雄伝

風神

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある異界の英雄伝

【Nコード】

N23440

【作者名】

風神

【あらすじ】

ある日死んでしまった主人公。

彼は最強の肉体、能力、剣を携え異世界へと旅立つ。
彼にどんな運命が待ち受けるのか、作者のみぞ知る。
今始まる最強の主人公の冒険ファンタジー！！！！

旅立ち（前書き）

駄文ですが是非読んで下さい。

旅立ち

「俺は死んだらしい。」

「何故わかるかというと、現在進行形で俺に土下座してる自称、神と名乗る老人が教えてくれたからだ。」

「ちなみに、今俺が立っているのは、何もない真っ白な空間だ。」

「要するに俺は貴方の手違いで死んだというわけですね？」

「そうじゃ。本当にすまん」

「尚も土下座をする老人。」

「もういいですよ。死んだんだからどうしようもありませんから」

「ああ。しかし、わしのせいで死んだのだから詫びをさせてくれ。これで許されるとわかっておらんが、せめてもの償いじゃ」

「あれ？この展開はもしかや……」

「君に第二の人生を与えよう。さらに、君の願いを四つまで叶えよう。唯し元の世界に戻す事だけはできんがな」

「テンプレ展開来たーーーー！！！！！！」

「マジかよ。こんなの二次小説だけの展開かと思ってたぞ。」

「それで、どんな願いが良いかの？ちなみに、向こうの世界の言語や文字は使える様にしてあるからの」

「じゃあ一つ目は、魔法のある世界に行かせて下さい。年齢はこのままで」

「承知した。魔物などもおる世界でも良いかの？」

「はい。それから、二つ目は肉体強化で。身体能力は型月の英霊並で。更に、剣術や体術、その他諸々を全て達人レベルに。魔力はその世界で最強の存在の五倍にして下さい。それから不老にしてください」

「了解した。不死でなくても良いのか？」

？「そんなに人の道から離れたくありませんから」
？「なる程の」

？「三つ目は自分オリジナルの固有結界を使える様にして下さい」
？「既に人外の様な気が．．．」

？「気にしたら負けですよ？四つ目は俺の知ってるゲームや漫画、アニメの能力、魔法全てを使える様にして下さい」

？「チートじゃな．．．」

？だつて、チート好きなんだもん！！

？．．．すみません。調子に乗りました。

？「まあよい、最後に君に生涯を共にするパートナーを与えよう」

？「パートナーですか？」

？「そうじゃ。まあこれだけの能力があれば必要ないじゃろうがの」
？それは言えてる（笑）

？「何でも良いぞ。神というのは無理じゃが、天使や悪魔、魔物、妖怪、はたまた英霊だつてありじゃぞ」

？「サービス良いですね」

？「わしはそれだけの罪を犯した。これくらいどうってことないわい」

？「そうですか．．．それじゃあ武器を下さい」

？「武器じゃと？」

？神様が不思議そうな顔をする。

？「はい。生涯を共にするパートナーは自分で見つけます。ですから、最高の相棒になれる武器を下さい。生涯を共にするパートナーをどんな奴からも守れるくらいの物を」

？しばしの沈黙。

？そして、

？「フオッフオッフオッフオッフオ！！！！」

？神様は某宇宙忍者の如く笑い出した。

？「まさかこのわしが一本取られるとわの。よかろう！！君にはこの創造神の名において、これ以上ない最強の武器をやろう！！！！全

異世界、全並行世界、全てにおいて最強の物を！！！！」

？そして、神様の手に現れたのは、そこにあることしかわからないナニか。

？間違いなくそこにあるのに、認識する事ができないナニかだった。つてか、あんた創造神だったんだ。

？「これは『創造の剣』。君が望むどんな武器にもなる正しく最強の剣じゃ。わしが数億年を掛けて作ったものじゃ。これを君に授けよう」

？「いいんですか？そんなものもらって」

？「勿論じゃ。ワシが持っていてても仕方のない物じゃしの。君ならばきつと良き担い手となるじやろう」

？「ありがとうございます。大切にに使わせていただきます」

？「うむ」

？そして、俺が『創造の剣』を受け取ると、ソレは俺の体の中に入つて行つた。

？「どうやら『創造の剣』は君を新たな主として認めたようじゃの。君の内界に入つて行つたのがその証拠じゃ」

？「どうやって使うんですか？」

？「心の中で念じればよい。さすればその剣は君の望む姿となって現れよう」

？「凄いですね・・・」

？「何せ、創造神たるこのわしが作った物じゃからの！！フォッフオッフオッフオー！！」

？だんだん、キャラが崩壊してきたなこの人・・・じゃなくて神様

(笑)

？「それでは、君を別の世界へ転送するぞ」

？「はい！！」

？「良い返事じゃ。新たな人生を満喫して来るがよい」

？「どうもお世話になりました」

？「うむ、そなたの旅路に幸多からんことを」

？つて、最後は次元の魔女かよ！！
？「行つてきます」

？最後の最後に心の中でツッコミを入れ、俺は新たな世界へ旅立った。

I Side 創造神I

？行つたか・・・

？彼が死んだのは手違いじゃった。

？彼は、己の親友を守るため、彼を突き飛ばし、自分は車に跳ねられ死んだ・・・

？しかし、それはありえなかった。

？彼の親友が死ぬのは決まった運命であつた。

？つまり、彼は人の身で神の定めた運命を退け、世界の法則を捻じ曲げた。

？こんなことは有り得ぬ。

？彼の出生を調べても彼が普通の人間であることは明白だった。

？人の身で世界を変えうる力を秘めた彼をわしはこのまま死なせるのは惜しいと思った。

？だから、わしは彼を生き返らせ、あの世界へ飛ばした。

？わしですら、直接の干渉が出来ぬあの世界へ。

？彼なら、世界の運命を変え、あの世界を救うてくれると信じて・・・

I Side OutI

?物語は動き出した。

?もうこの歯車は止まらない。

?この先の彼の運命は神にすらわからない。

?今、伝説が始まる

?とある異界の英雄伝

旅立ち（後書き）

主人公 黒神 剣

年齢 18歳

黒髪に蒼眼

髪型は某かみやん風

巡り会う二人

? どうも皆様、黒神剣です。

? 異世界へと来た私ですが、只今絶賛落下中です。

? だってこんなテンプレ展開いらねえよ!!

? 空は快晴、雲を突き抜け落下中。

? 高度は2000メートルってとこかな。

? だってそんな冷静な分析してる場合じゃねえだろ!!

? とまあ、ツツコミはここまでにして、これからどうしようかな。

? 地面衝突まで後、二十秒。

? どうしても出来るが、先ずはこの体の性能を見るところか。

? 俺は空中で高速回転をする事で、落下スピードを落とす。

? おお、冗談半分にやったが本当にできるとは。

? でもこれをしたら目が回るな。

? じゃあ次は肉体強度を調べるか。

? 俺は回転を止め、何となくのイメージで体に魔力を纏う。

? まあ、アーチャーだって落っこちても何の問題もなかったみたいだから大丈夫だろう。

? そして、

? 「ズドオオオオオオオオオオン!!!!!!」

? 俺は地面に落下した。

? 地面には直径5メートル程のクレーターが出来る。

? 「だっててて...」

? 俺はゆっくりと起き上がるが、体に以上はないようだ。

? 流石英霊並の肉体だな。

? そして、周りを見渡すと、

? 「なんでさ...」

? 俺の目の前では白と赤の鎧を着た兵士と思われる軍隊が十数万人いる。

？赤の鎧を着た兵士が10万。

？白の鎧を着た兵士が5万といった所だろう。

？お互いの距離は200メートル程だろうか？

？その中心で馬に跨った赤と白の甲冑を着た二人の將軍と思われる人物が話している。

？俺は、聴覚を強化して話を聞いてみた。

？「去れ。我らアイリス王国はどの国の傘下にもつかん」

？白の甲冑を着た人が赤の甲冑を着た人に言う。

？「フン！！弱小国家が何を言う。我らガノン帝国の傘下につけ。さもなければ貴様ら全員死ぬ事となるぞ？」

？赤い甲冑の人が脅しを掛ける。

？「我ら、アイリスは今までどの国の傘下にもならず、戦争もなく平和な国だった。貴様らガノンの様な野蛮国家につけばこの美しい自然も失われ、多くの民が血を流すだろう。そんな事は断じて許さん！！」

？「皇帝陛下の全土統一という崇高な目的がわからんのか！！ならば貴様の首を陛下に献上してくれるわ！！」

？赤い甲冑の人が剣を抜いた。

？「そう簡単にいくと思なよ？」

？白い甲冑の人も剣を抜く。

？「後悔させてくれるわ！！」

？そして、二つの軍が互いの敵に向かって走り出した。

？うーん。どう考えてもあの赤い奴らは悪モンだよなあ。

？どっちが正しいと言うつもりはないけど、赤い方の奴らは気に食わない。

？「じゃ、この最強チートな俺がアイリスに協力しますか」

？俺は、一本の刀を想像する。

？そして現れたのは一本の大太刀。

？思い浮かべるのはかの世界最強の剣豪の斬撃。

？俺は魔力を集め、両軍の間に剣を振り下ろす。

？すると、地面が真つ二つの割れ、両軍の間には幅20メートルの谷ができる。

？両軍は何がおきたかわからず動きを止める。

？だが一番驚いたのは、

？「・・・あれ？」

？俺がしたかったのは斬撃を飛ばして両軍を止めるだけだったのに。
？魔力を込めすぎたのかな？

？後にわかったのだが、この時に俺が込めた魔力はこの世界の平均的な魔法使い1万人分はあったらしい。

？まあ、それは置いといて、俺は両軍の上空にテレポートする。

？「両軍とも戦闘を止める」

？俺の突然の登場に両軍が驚いている。

？「何者だ！！」

？赤い甲冑の人が俺に剣を向ける。

？「貴様らに名乗る名は無いが、この地面を切り裂いた者だけ言
つておこうか」

？ちよつと口調を変えてみた。

？まあ、カツコつけたかったただけだね。

？「戯言を！！」

？「どうか？」

？俺は空にあつた雲に向けて剣を振り下ろす。

？すると、雲は真つ二つになった。

？「それでも戯言か？」

？「そんな馬鹿な事があつてたまるか！！」

？赤い甲冑の人が直径1メートル位の火の玉をこちらに飛ばしてく
る。

？俺は軽くそれ避ける。

？へえ、これがこの世界の魔法か。

？詠唱をしなくてもいいのかな？

？まあ、それは後でいいや。

「ガノン帝国は即刻去れ。アイリス王国に手を出すつもりならば容赦はせんぞ」

「たかが、ガキ1人が調子に乗ってんじゃねえぞ!!」

？ガノン軍から空を埋め尽くす程の矢が放たれる。

「避けてもいいのだが、そうするとアイリス軍に被害が出そうだな。」

？俺は炎の竜を想像する。

？単発火竜じゃキツイかな？

「同時竜焰群」
「碎羽」
「崩」！！

「俺は指で、
『焰』
『砕』
『崩』と書く。」

？すると、大量の火の玉が現れ、そこから炎の鎖鎌が出現し、矢を焼き払っていく。

「これぞ八竜の力だ！！」

「ば、馬鹿な……こんな事が……」

？ガノン軍の将軍も呆気にとられた様だ。

「ガノン軍、貴様らは運が悪かったな。サッサと軍を引いた方がいいと思うぞ」

？白い甲冑の人が言う。

「な．．．何を．．．」

？「あれが誰かは知らんが、あれは規格外だ。命がいくつあっても足らんぞ？」

？赤い甲冑の人はその言葉に激怒する。

？「ふざけるな！！我らガノンは最強だ！！たかだか一人のガキに負けるものか！！」

？激昂した赤い甲冑の人は白い甲冑の人へ大量の火の玉を放つ。

「？つ！？」

？白い甲冑の人は交わそうとするが、馬が突然の事に驚き、暴れて地面に叩きつけられる。

?「死ねええええええ!!!」

「このタイミングでは避ける事は出来ないだろう。」

「まあ、ここに俺がいたのは運が良かったなアイリス軍の人。」

？「竜之炎伍式『円』！！」

？？白い甲冑の人の周りに現れた火の玉が線で結ばれ、面を作り出す。

？これぞ炎の結界、円の力だ。

？結界により、白い甲冑の人は無事の様だ。

？「ガノン軍！！」

？俺の声が木霊する。

？「貴様らは俺の忠告を無視したんだ。どうなっても文句はいうなよ？」

？俺はアイリス軍を『円』で囲む。

？「出番だぜ、邪悪竜」

？そして、指で書くのは『刹』の文字。

？「竜之炎四式『刹那』！！」

？俺の背後に現れる炎の竜。

？その叫び声は聞いた者全てを怯えさせるだろう。

？そして、開かれる一つの目。

？「瞬炎」

？瞬間、目の前にいた全てのガノン軍の兵士が燃える。

？邪悪竜『刹那』。

？能力はその目を見た者を燃やす瞬炎。

？アイリス軍は背後にいたし、『円』で囲っていたので無傷だ。

？「これじゃあ終わらねえぞ？」

？次は大量の剣を創造する。

？すると、俺の背後から大量の武器が現れる。

？聖剣、魔剣、斧、槍なんでもある。

？その数1000個。

？「王の財宝　ゲート・オブ・バビロン　+無限の剣製　アンリミテッド・ブレイドワークス」

？そして、ガノン軍に向けて射出する。

？これらの宝具は全て本物。

?あの赤い弓兵の物とは威力が違う。
?宝具一つ一つが流星群の如くクレーターを形成する。
?そして仕上げる、
?「壊れる幻想 ブローケン・ファンタズム」
?全ての宝具を爆発する。
?世界は一瞬光に満ち、音を失う。
?そして、
?「ズドオオオオオオオン!!!!!!」
?轟く轟音。
?大陸全体が揺れているのではないかと思う程の衝撃。
?ガノン軍は一人離れていた甲冑の人以外全滅していた。
?それにしてもこの二つは合わせちゃダメだな。
?マップ攻撃ってレベルじゃない。
?下手すると核爆弾並の威力が出せるかもしれない。
?しかし、更に驚いたのは、ガノン兵は全員気絶しているだけで死
んではない。
?俺が誰も死なない様に思い浮かべたからだ。
?これが『創造の剣』の力。
?なる程、最強のチート武器だな、こりゃ。
?俺は赤い甲冑の人に前に降り立つ。
?「ひいつ!」
?男は腰が抜けて動けなくなっていた。
?「た、助けてくれ...お、俺が悪かった...もうこの国には
攻めて来ないから...」
?哀れだな...
?「ガノン帝国はどっちだ?」
?「あ...あつちに500キロ行った所に国境があります」
?俺は千里眼を使い、関所の様な物を発見する。
?確かに同じ鎧を着た兵士がいる。
?それじゃあ、

？「右手からルーラ、左手からルーラ。合体魔法『オクルーラ』！」

？ガノン兵をこいつ以外全員そこへ飛ばす。

？「な、何を．．．」

？「全員、国境に飛ばしておいた。因みに1人も死んでないから。それと」

？俺はガノンの將軍に強烈な蹴りを腹に叩き込み気絶させる。

？「お前はアイリス軍に引き渡すから」

？俺はガノンの將軍を担いでから、アイリス軍を囲っていた『円』を消す。

？俺が近づくと、白い甲冑の人はこちらに剣を向けてくる。

？「ガノンを追いつ返しした事には感謝する。しかし、貴様は何者だ？」

？やっぱ警戒されてんな。

？猫を被ってみるか。

？「人の名前を知りたければそっちから名乗るのが礼儀ですよ」

？俺の口調が変わったのに、相手は少し驚いたようだ。

？「それは失礼した」

？そして、甲冑の頭を外すと美しい黒髪が現れる。

？俺は担いでいたガノンの將軍を地面に落としてしまう。

？「私はアイシャ。アイシャ・クレストだ。アイリス軍2番隊隊長だ」

？ずっと男と思っていた甲冑の人は女性だった。

？美しい黒髪をサイドテールにしており、腰より下まである。

？キリッとした瞳はサファイアのように澄んだ青色だ。

？歳は俺と同じ18くらいに見える。

？俺は彼女の美しさに目を奪われ、一瞬言葉を失ってしまった。

？彼女はそれ程までに美しかったのだ。

？「俺は黒神剣。まあしがない旅人です」

？「旅人にしてはあまりに強すぎだと思うが？それにこれはどうするつもりだ？」

？彼女の指差す先には俺が作り出した惨状。

？「あ、すいません。すぐに直すんで」

？「は？」

？俺はパンつと手を合わせ、地面に手を当てる。

？すると、バチバチつと放電した後、みるみる地面は元に戻ってゆき、谷も無くなった。

？「な、何だそれは！？」

？「これは錬金術っていうものです。物質を理解、分解、再構築で
きる技術ですよ」

？「錬金術・・・聞いた事もないな」

？まあ、漫画の世界の技術ですから。

？「あの谷もそれでやったのか？」

？「いえ。あれはたんなる魔力で斬撃を放っただけですよ」

？まあ、予想外の威力が出たけどね。

？「・・・貴様、ツルギとかいったな？」

？「はい」

？アイシャさんが手を上げると兵士が俺に槍を向けながら囲む。

？「一緒に城まで来てもらおう」

？「何ですか？」

？「当然だ。そんなデタラメな力を持っている奴を放っておけるか」

？まあ、そりゃそうだ。

？ま、この世界の情報も欲しいしついて行くか。

？どうせやばくなったら逃げればいいし。

？それにこの人も気になるし。

？「わかりました。貴方に従います」

？「・・・アイシャだ」

？「はい？」

？「先程名乗っただろう。私はアイシャだ。貴方ではない」

？「あ、すいません。では行きましょう。アイシャさん」

？「さんもいらん」

？「え？でも．．．」

？「私がいらんと言ったらいらん。それから敬語もな」

？何かキヤラ変わってないですか？

？「わかった。これでいいか？アイシャ」

？「つつ！？あ、ああ。よし私について来い。ツルギ」

？アイシャは早足で行くので、俺も急いでついて行く。

？アイシャの耳が赤く見えるのはきのせいだろうか？

あ、ガノン軍の將軍はその後兵士が回収したらしい。

I Side アイシャー

？彼は突然現れた。

？大量の矢を不思議な炎の魔法で焼き払った。

？その後、デリム（ガノンの將軍）が放った炎から私を助けてくれた。

？一体何故だろう？

？その後、ガノン軍を一瞬で燃やし更に大量の武器を出現させ、吹き飛ばした。

？そこから更に爆発した時は心臓が飛び出る程驚いた。

？私を囲んでいた結界がなければ今頃鼓膜が破裂してうただろう。

？それから彼はガノンを一瞬で何処かへ飛ばした。

？どれも私が知らない魔法。

？彼が近づいて来た時は、警戒してしまったが、口調が先程と違う事に少し驚いてしまった。

?クロカミ ツルギ

?それが彼の名だ。

?聞いた事もない名前だったけれど遠くの国から来たという事だろう。

?その後も荒れ果てた地を一瞬で直し、兵士が取り囲んでも全く動揺を見せる事がなかった彼は本当に何者だろう。

?唯の旅人ではない事だけは確かだ。

?でも、彼が私の名を読んだ時に湧き上がったこの感情はなんだろう。

?彼が私の名を読んだ時、私は恥ずかしくて顔を真っ赤にしてしまい顔を背けてしまった。

?彼は何者なのか、この感情は何なのか、わからない事ばかりだ。

?しかし、私は彼にであった事が幸福であったと断言できる。

?これが、かれの伝説の始まりだったのだから

?I Side Out

?運命は動き出した

?彼らは出会い、巡り合った

？ 合わさる歯車

？ これは序章

？ 物語は始まった

？ 彼が歩む選択に何が待ち受けるのか

？ 伝説は始まった

巡り会う二人（後書き）

今回は烈火の炎中心に出しました。

ONE PIECE・・・鷹の目

烈火の炎・・・同時竜、刹那、円

Fate・・・王の財宝、無限の剣製

ロトの紋章・・・ルーラ、オクルーラ

鋼の錬金術師・・・錬金術

これから投稿が遅くなると思うのです気長に待ってください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2344o/>

とある異界の英雄伝

2011年10月8日02時44分発行